

母親からみた小児科受診時の乳幼児の啼泣状況

藤原千恵子，永井利三郎，藤井 恵，絹巻 宏，日野利治，藤田 位，
山入高志

【目的】乳幼児が小児科受診時に不安や恐怖心から痛みが伴わない診察においても啼泣することがあり，それらが母親の不安や診察困難につながると考えられる。そこで，本研究では，小児科の診察時に乳幼児がどの程度啼泣していると母親が認識しているかを明らかにする目的で調査を行った。

【方法】調査は 4 か所の小児科に受診した 6 歳未満の乳幼児の母親 400 名を対象に，痛みを伴わない診察での乳幼児の啼泣状況について質問紙による調査を行った。本研究は大学倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果・考察】208 名（回収率 52.0%）から回答を得た。母親の年齢は平均 32.8 歳(SD0.7)，1 歳 64 名（30.8%）と最も多く，0 歳 44 名（21.2%）の順になっていた。受診経験は，「よく受診する」133 名（64.0%）であった。過去の診察での啼泣は「以前から啼泣しない」121 名（58.2%）であった。乳幼児の啼泣は，診察室への入室から病状説明までの 4 つの場面で比較すると，「直接診察時」70%，それ以外でも 80%程度が泣いていない状態であった。これは，初めての受診が少なく，医院や医師に馴染みがあることが影響している。年齢別では，1 歳児，次いで 0 歳児の啼泣する割合が多くなっており，「直接診察時」で啼泣する割合が多かった。医療側の啼泣に対する研究では，1 歳頃が啼泣しやすいピークであることが報告されているが，母親の認識もほぼ同様である。痛みを伴わない診察でも，聴診などで身体に触れられることは乳幼児の不安や恐れを生じさせると思われる。個々の乳幼児での啼泣状況では 3～4 場面とも泣いている乳幼児が 18 名（8.7%）みられ，これらの乳幼児は過去の診察でも啼泣していたものが多かった。理解力が発達する 3 歳以上になっても啼泣し続ける場合は，理由や啼泣状況を観察し，有効な介入を検討する必要もあると考えられる。